

発達障害児のきょうだいの心理的支援プログラムに関する研究(2)

きょうだいの心理面や態度に及ぼす効果について

井上雅彦 ・ 平山 菜穂 ・ 小田 憲子
(兵庫教育大学) (大野小児科) (神戸女子大学)

Key Word : 発達障害児のきょうだい・心理的支援プログラム

・問題と目的

(2)では主にきょうだいの心理面や態度に及ぼす効果について検討する。

・方法

1. 対象

発達障害児をきょうだいにもつ6歳~13歳の子どもとその保護者16組(自閉症7組、知的障害5組、その他4組)であった。

2. 支援プログラムの実施

2002年7月から10月の期間に全5回のプログラムを実施した。プログラムは Myer&Vadasy (1994) のシブショップのプログラムを参考に、体を動かす遊び、落ち着いた遊び、話し合いの活動を組みあわせて構成した。話し合いの活動では 自分やきょうだいの長所を考えることで誰にでも長所があることを学ぶ活動、普段周囲の人に言えない気持ちを出し合ったり、他の人の考えについて知る活動、きょうだいと遭遇するかもしれない困難な状況を人形劇で再現してその対処法を仲間と考え、実際にロールプレイを実施する活動、きょうだいの障害についての学習活動、同胞に障害をもつきょうだいのいる大人の体験談を聞く活動、などをおこなった。スタッフはきょうだい担当約10名、親の会担当2名、保育3-4名であった。

3. 評価方法

事前・事後におこなった質問紙、各回終了後におこなわれたアンケート調査、各事例のプログラム実施中の行動変化を記録し、きょうだいの心理面や態度の変化を評価した。きょうだいの質問紙は同胞に対するきょうだいの感情を分析するために McHale (1986) らが作成したものをベースにし、きょうだいを対象とした調査研究(三原、1998)や障害児のきょうだい研究を参考に、小学生にも分かりやすい表現に改変したものをもちいた。プログラム実施中の行動変化は各事例のプログラム実施中の行動変化を記録した。記録は各セッション終了後、各事例についてスタッフから各々の活動ごとに行動変化について報告してもらい、その後ビデオ記録をもとに確認し、エピソードデータとして抽出した。また毎回のセッション終了後に保護者に子どもの行動変化について自由記述のアンケートを行った。

・結果と考察

1) プログラム実施中のきょうだいの行動変化

回を重ねるにつれ、自発的に友達に話しかける回数が増えていった。また初回はスタッフが中に入らないと遊べなかったが、2回目(キャンプ)の途中から自由時間に子どもたちだけで遊ぶ光景が見られるようになった。4回目には何人かの子どもたちから自由に遊べる時間がほしいという希望も出された。話し合い活動では初めは恥ずかしがってあまり発言しなかった子どもたちも回を重ねるごとに徐々に自分のことを発言する回数が増えていった。また他児が発言する内容に「自分も同じことがあった」と話す場面も多々みられるようになった。障害についての学習活動や大人のきょうだいの

体験などはじっと聞き入る様子が観察された。このことから仲間作りや自分と同じ立場の仲間の中で普段誰にも言えない感情や考えを出し合える場を得ることができたと考えられる。

2) 質問紙調査

事前事後に行った質問紙調査の各項目において符号検定をおこなった。その結果、各項目ごとによる事前事後の比較で1%水準で有意差が認められたのは「ときどききょうだい私の邪魔をすると腹がたつ」「私はきょうだいのことについての心配を誰かに相談できればよいのと思う」など39項目中3項目、5%水準で有意差が認められたのは15項目であった。質問紙の分析結果から話し合い活動で取り上げたテーマに関連する項目が有意に減少していることより、話し合い活動実施による心理的な変容効果が示されたと考えられる。

3) 家庭でのきょうだいの行動変化

保護者のアンケートより、多くの子どもたちは帰宅後も初めは「楽しかった」とだけ語っていたようだが、次第に遊び活動については具体的な内容を親に話すようになっていった。しかし話し合い活動については、スタッフや仲間から自発的に話した内容でも「お母さんには言わない?」などと確認する行動が見られたり、話し合いの内容について保護者からたずねられても答えなかった子どもが多かった。しかし話し合い活動で他のきょうだいの今までの経験を知り、自分の同胞に同様の状況がおこったときにその経験を参考にして対応できるようになったという報告やまた障害を持つきょうだいの世話を積極的に取り組むようになったという報告も見られた。

4) 総合考察

事前事後の質問紙調査の結果より、きょうだいたちが今回のプログラムに参加することにより、同じ立場の仲間と知りあったことで自分と同じ悩みをもっているきょうだい以外にも多くいることを知り、そのような仲間に悩みや不安を相談していきたいと感じるようになっていくことが示された。また、プログラム実施中や家庭での行動変化からも今回の支援プログラムが「仲間づくり」や障害理解に大きな影響を与えたと考えられる。また今回は一人当たりの子どものためのスタッフ数を充実させ、各回終了後にはスタッフミーティングをおこない、各子どもに対する個別対応を検討し、低学年のきょうだいに対する発達の配慮や行動的な問題を抱えている子どもに対して個別対応が可能のように配慮した。きょうだい自身もクラスの中で発言したり自己主張できない、行動的に落ち着きがなく集団に入りにくいなどの悩みや課題を抱えている場合があり、一人一人のきょうだいの心理的特徴やニーズに合わせたきめ細かい支援システムの必要性が示唆された。

・参考文献

Meyer, D. Vadasy PF (1994) Sibshops: workshops for siblings of children with special needs. Brookes, Baltimore.
INOUE Masahiko · HIRAYAMA Naho · ODA Nriko

